

“音楽とは、感動の絵巻を生み出す泉なり”

原音の探求に挑戦する男

巴里祭で賑やかな昭和41年7月14日。虎ノ門ホールは、勢揃いしたオーディオ評論家と、会場を埋め尽くした満員のオーディオ・マニアの熱気で、むせ返っていた。「ステレオはビクター」を自負する日本ビクターが、音響機器のリーダーとしての威信をかけた「ナマとスリカエの実験演奏会」が、今しも開幕しようとしているからである。39年の4月、朝日講堂で行われた初実験では、テープと演奏器のスリカエに初めて成功した。40年の7月16日には、北村栄治クインテットの生演奏から、レコード演奏へのスリカエに成功して自信をつけたステレオ事業部が、其の総仕上げとして実行に踏み切ったのが、大編成の SYMPHONY ORCHESTRA と、レコードのスリカエをやったのけようという今宵の演奏会である。舞台では、ニッフィルのピックアップ・メンバーで編成する ROYAL PHILHARMONIC ORCHESTRA のメンメンが、開幕のベルを今や遅しと待ち構えている。

○ お前の情熱と信念にかけると百瀬社長が・・・・・・・・

「モノラルがステレオになっただけでは、生の感動には程遠い。ステレオ機器を構成する各コンポーネントの、質だけを改良しただけでは片手落ち。それだけでは生の臨場感は得られませせん。そこで私は、音場パターンと、臨場感が作り出す感動との関係を、実際に大ホールを使って実験する事を決意しました。成功するか否かは、あくまでも2の次。業界のリーダーのビクターが、これまで誰も果たせなかった、考えもしなかった実験に挑戦する姿を、一般大衆に知ってもらえれば、目的は達成されも同然だと力説したのですが、常務会でも結論が出ずに困り果てた時、私に救いの手を差し伸べて下さったのが百瀬社長でした。“オレは鈴木健の情熱と信念にかけて見よう！よーし、やれーや・・・”とOKサインを出して下さったのです。其の日の感激が未だ昨日の事のように思えてなりません・・・」「ナマとスリカエ」という前人未到の実験を自ら立案して、実行に移した鈴木健さんは、しみじみこう語る。

○ 服部克久指揮 / ROYAL PHILHARMONIC ORCHESTRA

やがて開演のベルが鳴り終わると、舞台の左手から、あの独特の笑顔を見せながら指揮者の服部克久さんが、ステージに其の姿を見せた。

「この夜の実験は、ステレオ事業部だけでは到底出来るものではありません。スタジオの録音技術部、レコード事業部、営業本部、全国の営業所、ビクター音産の皆さんの、心からのご協力があったからこそ出来たのです。とりわけ指揮を担当して下さった服部さんは、連日に亘ったリハーサルで、度々の企画変更にも拘わらず、オーケストラの皆さんを、其の都度納得させながら対応して下さった事に感謝申し上げます」と健さんは付け加える。

やがて拍手が鳴り止むと、服部克久さんの指揮棒が大きく、激しく揺れ動いた。ビゼーの「カルメン」の、あの有名な前奏曲のメロディが華麗に、派手やかに会場に流れ始めたのである。音にうるさい評論家の先生は、一様に音の差異を聞き取り易いホールの中央部のS席に。一方北野専務は、会場の最後部の席に陣取って、戦況(?)や如何にと、あの大きな耳をそばだてている。会場で聞き耳をソバ立てているのは、何も北野専務だけではない。ナマ演奏とレコードの演奏が、いつ、どの部分でスリ替えられて会場に流れてくるのか、ホールを埋めた人達の1, 200ヶにも及ぶ両耳が、この一点に集中しているといっても過言ではない。

○ ナマとスリカエの仕掛け人 / ビクターオーディオを支えた男

“私はジプシイ女、小鳥みたいに私を飼いならそうなんて、出来やしないと、言い寄る男たちに、カルメンが真っ赤な花を投げつける……”あの有名なハパネラが、ROYAL PHILHARMONICのストリングセクションによって、美しく演奏され始めた。今宵の総指揮官の健さんは、「ナマとスリカエ」の劇的ドラマを、「ハパネラ」のシークエンスに仕掛けていたのである。前方サイドに設けられたスクリーンには、演奏の進行と共に、刻々と数字が映し出され、何番でスリカエが始まり、何番で終わったかを言い当てる仕組みになっているのだ。ところが「ハパネラ」が終わっても、誰も気づいた様子はない。我こそは、スリカエを当てようと、会衆が耳がまえ(?)をしている中に、オーケストラはプログラムの全てを演奏し終わった。服部克久さんの右手の指揮棒が動かなくなった其の時、場内は一瞬静まりかえった。そしてしばらくすると、静寂が、嵐のような拍手に変わったのである。実験の成功に対するビクターの拍手は鳴り止まず、場内は、しばし感動に酔いしれた。正解者はわずか1%とは、統計的にゼロに等しい%である。

健さんは、思わず舞台の上で北野専務と感激の握手を交わした。並み居る評論家達から健さんへの拍手の嵐……。健さんは早速、本社の社長室に成功の報告をした。百瀬さんは此の日、家に帰らず、電話を、今か今かと待ち受けていたという。此の実験の成功は、「臨場再生」を目指すビクター独特の音作りに、貴重な資料をもたらせた事は、申すまでもない。

○ 6人のサムライが、電蓄技術科をステレオ事業部に

「電蓄の事業は、ラジオやテレビのように、電波という放送局まかせの“タレ流しソフト”を、ただ受信、受像する装置を作る事業ではありません。ソフトとハードの両者を、自らの手で製作し、提供する事によって、そこに新たな感動を呼び起こすクリエイティブな事業です。従って企画も設計も、販売も独特なものが要求されます。電蓄をラジオから分離してください……」

日本ビクターが松下経営に入って間もない頃、一介の電蓄の設計者だった鈴木健さんは、臆することなく本社の門を叩き、北野専務にこう直訴した。其の当時、地方に行くと、ラジオは売っていても、電蓄売っている店はごく僅か。市によっては、ゼロという時代だった。一方電蓄の生産といえば、ラジオ工場の一角に間借り同然だった電蓄技術課の生産量は1ヶ月の中、僅か数日間で完了する程、其の需要量は少なかったのである。

「よーしやってみろ！お前の思うとうりやれ……」北野専務は、炎のように燃える鈴木健さんの直訴に、その場でOKのサインを出したのである。それからというものには課長以下5人の電蓄スタッフによる月月火水木金金の日々が続いた。40名のラジオ技術課と60名の白黒TV技術課を

向こうに廻して、鈴木健（課長）、金子勘作（モーター・プレイヤー）、松田文男（セット・アンプ）、菊池昭二（ピックアップ）、石井芳一（スピーカー）、沢地幸作（メカ）の6人のサムライ達の作業は深夜に及び、終電車に乗り遅れることしばしば。健さんは、深夜に発車する郵便貨物車を拝み倒して、新子安から平塚の自宅に辿り着いたと言う。やがて健さんグループの決死の努力が次々と実を結び、僅か数年で電蓄技術課は製造部となり、さらに生産部から事業部へと発展、ビクターの収益を支えるステレオ事業部へと、其の姿を変えていくのである。

○ 音楽とは、感動の絵巻を生み出す泉なり

ビデオが世に出るまで、オーディオでビクターを支えた男、鈴木健！

定年に関係なく、今でも原音の探求に生命をかける男、鈴木健！

大和工場、レコード工場、音研に建っている石碑には、鈴木健さんが、自らの思いを書き綴った言葉が刻みこまれている。

○ 原音探求 / 音楽を愛する者

“音楽を精神の糧とする者にとって、
音楽は信仰に似ている、
音の再生に生涯をささげるわれらは、
限りなき 奥深い原音の究明に、
悔いなき日々を生きなければならぬ “

以上「ニッパー（犬）とビクター仲間たち PART2（企画：日本ビクターOB有志、制作：小藤武門）」より。